

衣

名古屋友禅黒紋付協同組合連合会

江戸時代から受け継がれた

尾張独自の染

色数を抑えた落ち着いた特徴

着物の染色方法には様々な種類がありますが、その中でも高級な染の代表ともいえるのが友禅染です。友禅染は、京都が発祥で、各地に技法が伝わり産地を形成しています。そして加賀友禅や東京友禅とともに名古屋友禅も古くからの伝統を誇っています。友禅染の技法は、江戸時代中期に京都の宮崎友禅が



手描友禅

考案したとされ、尾張では七代藩主徳川宗春の時代に京都や江戸から多くの職人が来名し、その技法が伝えられました。名古屋友禅の特徴として色数を抑え落ち着いた色が使われることにあるとされています。

名古屋友禅は技法などの違いから手描友禅、型友禅の2種類があります。手描友禅は筆や刷毛で、型友禅は彫った伊勢型紙を用いて、友禅模様を基本に染めていきます。

また、名古屋黒紋付染は、白生地に紋型紙と紋当



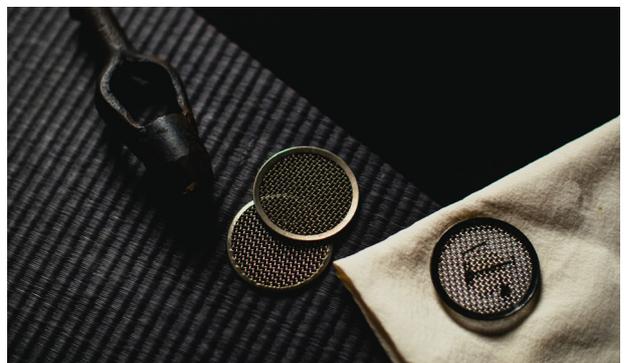
型友禅 左は友禅染のエコバッグ、右は子どもが染めた作品

金網を使い紋章部分だけ白く残して黒く染めます。名古屋の黒紋付染は、紅もしくは藍で下染をした後、その上から黒く染めることで、より深みがあるきれいな黒に染上げます。

手描友禅、型友禅、黒紋付染が連合

大正3年(1914)、名古屋絹布染色組合がつくられます。この頃、ドイツから化学染料が日本へもたらされました。当時組合員は680人もいました。昭和15年(1940)の^{しゃし}奢侈品等製造販売制限規則では、友禅染もその対象となりました。戦後の昭和22年(1947)に愛知県洗染商工業協同組合として再出発します。昭和32年(1957)には手描友禅、型友禅、黒紋付染がそれぞれ組織化されました。昭和58年(1983)に、名古屋友禅黒紋付協同組合連合会を結成し、友禅、黒紋付染がともに国の伝統的工芸品指定を受け、名古屋を冠した名称が広く使われるきっかけになりました。

連合会になったとはいえ組合員は現在13名。伝統産業を守るためには、後継者の育成が大きな課題です。20年ほど前から小中高生を仕事場に招いて教えるなど、次世代に向けて取り組んでいます。連合会としては伝統産業の啓発が最も重要な課題となっています。



黒紋付染(紋型紙、紋当金網)